〔問題〕

以下の文章を読み、共通善に関する著者の論議を踏まえ、「権力と国民」についてのあなたの考えを自由に論じなさい。

現代日本は「暴政」への道を歩んでいるのではないか。そんな想念がこのごろしきりに脳裏をよぎる。「暴政」などとは大袈裟な、という向きもあろう。「暴政」とは、『広辞苑』（岩波書店、第三版）によれば「暴虐な政治」のことである。確かに、現代日本では、政治的立場や宗教的信条、人種的差異などを理由として、人びとを組織的に強制収容したり虐殺の対象とすることはないようである。しかし、本来、西洋政治思想における用語としての「暴政」はヒトラーや最近のチャウシェスク、ミロシェヴィッチのような「暴虐」きわまりない独裁者による政治だけを意味するのではない。「暴政」とは、（中略）「共通善」に反する政治を意味する。

「共通善」は英語にいう common good であるが、その日本語訳は日常語として熟していないために、政治学に触れたことのない人にはおそらく聞き慣れない用語であろう。「共通善」とは、一口にいえば、社会や国家など政治共同体全体にとっての善のことを指し、ある特定の個人や集団にとっての善とは明確に区別されるものである。だから、「暴政」とはある一部の権力者や権力がひいきにする特定の集団が利益を享受することを目的とする政治のことである。

「共通善」の観点から見たとき、はたして、現代日本の政治は日本社会を構成する国民全員に「共通」の善を実現しているであろうか。衣食住という国民生活上必要最低限のレベルでは、日本国中がホームレスで溢れかえることもなく、むしろ、昨今のデフレ現象で物価は下降の一途をたどり、物質的に豊かであることは間違いない。しかし、政、官、財界の癒着による、不正な裏取引やさまざまな汚職が後を絶たない現状ははたして国民「共通」の「善」であろうか。また、昨今騒がれている年金制度の危機は、国民の勤労の成果を不当に国家が収奪した結果と見ることはできないであろうか。

翻って、目に見えない「善」はどうだろう。日本国民は、司法によって、その権利を行政権力から適切に守られているであろうか。国民全員に保障されている権利が、ある裁判において、ある個人に対して否定されたならば、それが判例となることによって、他の一切の国民に対してもその権利が侵害されることを結果する。そのような事態がはたしてこれまで戦後日本において皆無だったといえるだろうか。

戦後日本の民主主義はどうだろう。敗戦直後、理想として掲げた「民主主義」はその基本理念に違（たが）うことなく実践されているであろうか。さらに教育はどうだろう。国民がおのおの理想と考える教育を子供たちに与える自由があるだろうか。日本近現代史をどう解釈するかをめぐって国家が検閲した教科書でなければ教育現場で採用できないことは明確に区別されるものである。だ

（7頁につづく）

現状は、権力の教育に対する不当な介入とはいえないだろうか。これらわずかの疑問に対してさえ、自信をもって日本の現状を容認できる国民はほとんどいないのではあるまいか。

しかし、人は概して自分を取り巻く環境に慣れっこになりがちである。現状がおよそ理想的とは言い難いものであっても、これに耐えているうちに次第にそれに慣れてしまう。そうして、気づかぬうちに現状の危機的本質を過小評価することになる。

今日でこそ、ヒトラー支配のもとにあるドイツ社会のドキュメンタリーフィルムを見て、われわれはその狂気に唖然とする。しかし、看過してはならないことは、その時代を実際に生きた人びとの多くにとっては、その時代の異常性が必ずしも明確に意識に上らなかった、という事実である。帝制を廃止し、共和制に移行したワイマール期のドイツが、当時としては画期的な、男女平等、言論・集会・政治結社の自由を享受しえたのはナチス政権誕生までの一〇年余であり、その代償が誰の目にも明白になるには一九四五年の破局に至るまで、さらに一三年が経過しなければならなかった。その間、破局へのシナリオは着々と進行していたのであるが、日々の事態のわずかな変化はともすると、容易に見過ごされてしまう。かくして、当人にはその迫りくる破局が最後の最後にいたるまで、その本質においてまったく認知されないことになる。

ナチス政権下のドイツの多くによって、その政治の異常さがまったく意識されなかったことを、現在という、いわば安全な地点から見て、その浅はかさ、愚かさを嘲笑するのはたやすい。しかし、その時代、その状況に自分が実際に直面したとき、その異常性を明確に認識することがはたして可能か。そう認識できると自信をもって答えられる人はどれだけいるであろうか。さらに、その危機的事態を把握できたとしても、その状況下で当時の大多数のドイツ人とは異なる言論活動や政治行動をはたして自分がなしえたであろうか。

こう問い直してみるとき、歴史はもはや現在のわれわれとまったく無縁な、過ぎ去ったものではありえない。生々しい「現実」として、われわれに切実な問題を突きつけるのである。普通、われわれは「過去」とは無関係な「現在」においてのみ、生を営んでいるかのように思う。しかし、およそわれわれが「現在」、と気安く呼んでいるものも、結局は「過去」なのである。「未来」はまったく未知であるのに、それが眼前に顕現したときには、まさにその刹那においてすでに「過去」になっている。そして、一刻一刻の変化は微小であるだけに、その変化に多くの場合気づくこともないし、いわんや驚きを感じることはいっそう困難である。はたしてわれわれは、政治や経済、社会を取り巻く現実の、毎日の微小な変化に驚き、怒りをおぼえる能力を失ってはいないだろうか。

（出典）将基面貴巳『反「暴君」の思想史』（平凡社、二〇〇二年）